

学位論文題名

陸羯南の政治認識と対外論

- 公益と経済的膨張 -

学位論文内容の要旨

本稿は、新聞『日本』(1889-1906)の主筆として、明治後期の「対外硬」運動のイデオログ的存在であった陸羯南(1857-1907)の対外論を分析し、それをもって日本のナショナリズムが明治20年代から30年代を通じて対外膨張色を強めていくプロセスの一面を分析しようとするものである。陸羯南についての研究は、戦後丸山真男氏による「健康な」ナショナリズム論の提示以来、日清戦前(明治20年代)の論説を対象とした政治思想の分析に集中しており、対外論に関しては特定の事件や時期に限られた断片的な検討があるにとどまっている。本稿はその研究史上の欠陥を踏まえて、彼の対外論を国内の政治認識との関連で捉えながら、明治20年代における「健康な」ナショナリズムのその後の行方を体系的に追うことをその目的とする。

分析の視角は二つである。一つは、彼の対外論を基底において持続的に規定していたモチーフ(第一章で説明)を彼の政治観との関連で把握することである。二つ目は、そのモチーフが国内外状況の変化にしたがって、どのような形で表出してくるのか、即ち、議論の変化の内容を具体的に分析することである。分析にあたっては、『日本』のパトロンで、「対外硬」運動のリーダーだった谷干城と近衛篤磨を横軸とし、また「対外硬」グループとは距離をおき、近代化＝「欧化」路線をとっていた徳富蘇峰を縦軸に設けて、それらと比較しながら彼の位相を定める方法をとる。

第一章では、本稿の考察の前提として、彼の思想の原理的な考察が多かった日清戦前の論説を分析して、以下の二点を提示する。第一に、本稿の視角である彼の政治観と対外問題の関連を説明する。羯南は共同体的な政治社会像を基に思想を築いていたが、その政治像からは、原理的に共同体の防衛と福祉(＝公益)が政治の第一義的な目標とされ、それを重んじる公共精神が重要な価値として認められる。国民の福祉のため、「国民全体」の「公益」を対外的に図ることが、羯南の対外論を規定していたモチーフだったのである。

第二に、彼のナショナリズムの原型をなす「国民主義」(『国際論』という著述もその延長線上にある)を検討する。彼の「国民主義」とは、国民国家としての「独立」の基礎をなす、文化共同体としての「国民」の確立と、その「自衛」を唱えた主張である。即ち、先に述べた国民共同体の防衛の論理がまさに彼のナショナリズムの原点だったのである。それとともに、「国民主義」は世界各国の対等な生存権を訴えており、一国の利益と世界大の「公益」との関係についても課題を提示していた。以上の政治観と「国民主義」の命題という二つの前提が日清戦後、どのように展開されていくのかを以下で考察していく。

第二章では、日清戦争の勃発から日清戦後経営期までの羯南の議論を扱う。戦争の勃発

とともに急に攻撃的となっていくナショナリズムを背景に、羯南は日清戦争の意味を、日本の東亜における地位を「狙上」から「料理人」へ転位させる転機に見だし、戦局の推移に至大な関心を注いだ。ただし、彼は戦争をその目的に限定して考え、むやみに戦争を拡大することに消極的であった。ここに彼は「北守南進」論を唱え、台湾の獲得で戦局を結ぶように促した。それゆえ、「三国干渉」に関しては、欲張ったあげく外国の干渉を招いてしまった政府にこそ責任があると追及したのである。

一方、戦後、彼は国民全体の福祉のための外政という観点から、朝鮮・清国における起業や貿易の拡大などを内容とする「対外平和事業」を主張し、国民の福祉に役立たない大軍拡を柱とする戦後経営には反対した。彼は、進歩党との提携による第二次松方内閣に陰で深くかかわることによって、その主張の実現に努めた。だが、地租増徴問題を契機に同内閣は崩壊し、羯南は再び野党の支持へもどった。なお、この時期に朝鮮に対して、羯南は日本勢力の衰退を阻止すべく、閔妃殺害を伴ったクーデータの正当性を擁護していた。

松方内閣の崩壊とともに政局が流動化する中で、ドイツの膠州湾占領を皮切りに始まった中国分割は、羯南の主張を急激に強硬化させた。第三章では、それ以後、義和団事件発生以前までを考察している。独露の清国領土占領の当初、羯南はその余波が日本にまで及ぶことを憂慮し、防衛の緊急性を訴えていた。しかし、その恐れがないことが判明すると、しだいに中国に対する利権要求を唱えていく。

その主張は、「対外硬」運動における新しい主体一近衛篤磨と東亜同文会一との密接な関係によって、積極性を増しており、その内容において当時の世界的な「帝国主義」政策と大差のないものであった。実際、羯南の主張は期せずして蘇峰の「帝国主義」論と一致することになってしまうのである。ただ、注意すべき点は、羯南が対外的に「国民全体」の利益を追求するのは国民国家として正当な要求であり、中国に対する利権の要求もその一環だと認識していたことである。つまり、国民全体の福祉という彼の対外論の観点は、この時期に「帝国主義」論となって展開されたのである。なお、羯南と蘇峰の「帝国主義」をめぐる論戦以降、日本では「帝国主義」の概念が肯定的に受けとめられていく。

第四章では、義和団事件発生後から日露戦争にいたるまでの時期を検討する。前章までの時期において昂進していた自国利益の主張は、義和団事件への関与を通して日本が列強の仲間入りを果たすのと同時に、しだいに世界の「公益」との調和の問題へ議論の重点を移していた。その議論の焦点は、列国協調と、中国・朝鮮に対して相互利益を唱った「開発」にあった。つまり、彼は係争中の満州をふくむ中国北部を中立地域にして、列国が共同で開発することによって利益の均霑をはかるべき「公共」の場としようとしたのである。

この主張はたしかにロシアの満州占領以後、開戦をも辞せずと強硬化していた東亜同文会の立場と比べると、穏健な主張であった。しかし、反面、それはあくまでも「帝国主義」の立場にたった議論であって、世界各国の対等な生存権を唱えた「国民主義」の精神とはかけ離れたものと言わざるをえない。

以上の過程を経て、羯南は条約改正反対で示した防衛的なナショナリズムから徐々に「帝国主義」へと転換した。だが、彼は通商国家論から出発して経済的膨張へと、一貫して国民全体の福祉という観点から対外関係を論じていた。そのことが彼をして軍事的手段による膨張に消極的にさせたと思われる。結局、彼の共同体観に基づいた国民全体の福祉＝公益という政治観の存在は、一方では自国利益の主張によって対外膨張へとつながったが、他方、その目的にそぐわない対外膨張には抑制の働きをしていたともいえるのである。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 中 村 研 一
副 査 教 授 古 矢 旬
副 査 助 教 授 松 浦 正 孝

学 位 論 文 題 名

陸羯南の政治認識と対外論

— 公益と経済的膨張 —

本論文は、明治日本有数の思想家にして新聞人であった陸羯南(1857-1906)に焦点を合わせ、日清戦争前後から日露開戦にいたる時期の日本の対外認識及び対外関係の変質過程に光を当てようとするものである。この時期はおりしも、世界史的にみれば「帝国主義時代」に符合している。ここでの著者の主たるねらいは、東アジアに生まれた一列強としての日本に特有の「対外膨張論」の起源を探ること、そして明治日本のナショナリズム（「国民主義」）の質的变化の跡をたどることにある。

このような歴史的舞台設定のもとに、著者が選び取った「狂言回し」が陸羯南である。なぜ羯南か。第一に羯南は日清、日露戦間期における有数の知識人であり、従来明治中期のいわば「健康な」ナショナリズムを代表する言論人と評価されてきたからである。第二に当時から彼は、この時期に興隆してくるいわゆる「対外硬」運動の中心的活動家かつイデオログと目されてきたからである。そして第三に、羯南には、国内政治認識と国際政治認識とを関連させて把握しようとする思想的貫性が認められるからである。かくして羯南の思想と行動に着目することにより、戦間期の日本ナショナリズムの「自衛的国民主義」から「侵略的国民主義」への転換過程を、政治思想史のかつ政治史的に跡づけることが可能となる。

羯南が、国内政治と外交とをとらえる際に用いた共通の思想的規準を、著者は「共同体主義」とみる。そして著者のみるところ、一般に政治の役割は共同体にとっての「公益」追求にあるという主張に関して、羯南は終生一貫していた。羯南の思想の柱を、従来の学説のように「自由主義」にではなく、このような「共同体主義」に求めた点に、羯南論を分析する場合の本論文の独創性が認められる。

著者によれば、「健康なナショナリスト羯南」「自由主義者羯南」という把握のしかたにつきまとう難点は、それが日清戦争時までの羯南のそれも一面しか説明できないことにある。すなわち、戦後むやみな軍拡に反対した羯南が、反面で朝鮮・清国に対する経済的膨張を主張した理由や、やがてこれらの地域への日本の帝国主義的施策を容認し、結果として徳富蘇峰流の侵略主義と選ぶところのない主張へと転じていった過程は、彼を一貫した自由主義者とみなしたのでは理解できないのである。ましてやこのような羯南像からは、日本の朝野が「侵略主義」へと傾斜を強めていった政治史的背景をうかがい知ることはで

きない。羯南の思想の根幹に、共同体の防衛と福祉とを至上の価値とする「共同体主義」をみることによって始めて、日清戦争前後までの彼の「国民主義」の防衛的性格も、義和団事件以後の国民的利益追求という目的によって正当化された侵略的言論も、そして相互利益を名目とした清国・朝鮮の「開発」論も、すべてが統一的に理解可能となる。

しかし、「公益」重視に関する羯南の一貫性それ自体が、やがて現実政治における彼の立場を弱める結果となっていった。義和団事件以後の東アジアにおいては、日本という国民国家内部の「公益」を世界政治における「公益」と結びつけこれとの調和をはかることがいちじるしく困難になってきたからである。そこにおいては、国民利益のためならばロシアとの開戦も辞さずとする、より赤裸々な権力政治的言論が幅を利かせることになる。羯南ではなく、近衛篤磨と羯南以外の東亜同文会の面々や、対口開戦の急先鋒である「七博士」が「対外硬」の世論を主導するにいたったのである。

以上のように本論文は、明治期日本のナショナリズムの展開を、一人の重要な言論人を軸として理解しようとするところみたものである。そしてこの著者の意図は、十分に成功をみたと評価することができる。

第一に評価できる点は、対象と対象理解のための方法論との適合性である。この近代日本の重大な転換期を論ずるに際しての、著者の手法は半ば思想的、半ば政治的であるといつてよい。これは本論文の長所の一つであるが、著者は政治思想をそれが現実の政治状況と交錯する点でとらえようとしている。羯南の対外論は、現実社会の動向から隔離された彼の脳髓の働きの産物としてではなく、多くの他者の思索と関わる点において抽出されている。その時々具体的な争点をめぐる谷干城、徳富蘇峰、近衛篤磨らの思想家や政治家の言動との対比を通して、羯南の思想の多面的性格があぶり出されるとともに、曲がり角の政治状況が含んでいたであろう多様な現実的選択肢が示唆されている。

第二に、本論文においては、対象批判と、対象の客観的で内在的な理解とがみごとに両立している点が評価できる。まず戦前の日本の侵略的ナショナリズムを批判的に理解するに際して、著者の選んだ時代そして思想家が重要である。「健康なナショナリズム」といわれる思想潮流から「侵略的」ナショナリズムが派生してくるまさにその瞬間を、凡百の煽動家ではなく明治日本の最良の知識人に着目してとらえたことによって、本論文は、戦前の日本の対外思想の一つの源流にさかのぼることに成功したといつてよい。

そして第三に、上の二点と関連して、浩瀚な史資料の渉獵と的確な選択、そして正確で公平な読みがなされていること、すなわち歴史家がもっとも尊ぶべき美質が本論文からうかがえることを、指摘すべきであろう。

しかし、最後にあえてこの優れた論文の欠陥にもふれておかなければならない。第一に、本論文が、日本外交の侵略主義への転換の狂言回しとして羯南を選択したことからくる弱点である。本論文によれば、日本の朝野が「日露開戦」へと旋回してゆく、まさにその時期に羯南の社会的影響力は減衰していったという。だとすれば「侵略主義」の起源をめぐる考察は、羯南以外の思想界、言論界、政界へと及ばなければならない。補論における「七博士」への言及は、文字通り補論にとどまっているが、これに類する多様な事例を取り上げ、もう少し大きな政治史的文脈で展開してほしかった。

第二に、侵略主義の多様な側面をもう少し緻密にかき分ける必要はなかったであろうか。とりわけ、羯南の「開発」論と簡単に対比されたにとどまった「アジア主義」については、現在の学界の水準をふまえて独自の解釈を提示すべきではなかったか。

第三に、この論文の一つの主題が、明治日本の外交論にあるとすれば、外交の実務家すなわち外交官、軍人、政治家の思想言動にも目配りをすべきではなかったか。

しかし、これらの諸点は、このきわめて独創的な論文に対する望蜀の指摘であろう。日本語の質も、一部を除いて極めて高く、これが外国語として書かれたことを忘れさせるほどである。

以上、審査委員会の全員一致で、本論文を博士論文として合格と判定する。